

式辞

本日ここに第68回広島市立舟入高等学校卒業式を挙行するにあたり、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

先ほど、362名に卒業証書を授与いたしました。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんのこれまでの努力に、あらためて敬意を表したいと思います。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。お子様の新たな門出に、お喜びも一入と拝察いたします。皆様のこれまでのご苦勞とご努力に敬意を表する次第でございます。私ども教職員は、舟入高校に居合わせ、ともに活動し、学習する生徒らが、互いに高め合えるよう努めてまいりましたが、至らぬ点もございました。このことを、お詫びするとともに、保護者の皆様には、本校の教育にご理解をいただき、一貫してご支援を賜りましたことに、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、平成26年8月に広島市で大規模土砂災害が発生しました。さらに、国内外では、度重なる自然災害の発生、社会問題、国際紛争、難民問題など、課題は数え切れません。そして、この学年は、これらを、身近に感じ、その影響を受けた学年でもありました。急な予定変更を行った修学旅行でしたが、その実施に際しては、先生方の努力と保護者のご理解があったことを覚えておいて下さい。

広島市立のすべての高等学校では、卒業証書に折り鶴を再生した紙を使用しております。「平和と希望の象徴」として、この卒業証書を手にし、改めて、世界の人々の平和への思いや願いを共有し、継承し、さらに郷土広島への愛着や誇りを一層強く持ってほしいという期待からです。特に、本校は原爆によって六七六名の尊い命を失った広島市立第一高等女学校を前身とする学校です。皆さんには、この自覚と、切実な願いを引き継いでいく使命があります。

時代は、めまぐるしく変化する状況に対応し、課題を解決していく気概を若者に期待します。それに応えるためには、多様な人々との対話と協力は避けては通れません。私たち大人が残した課題を君たちに解決してほしいと期待するのは虫が良すぎる。後ろめたくさえ感じます。それでも、舟入高校を卒業していく皆さんには、敢えて期待をする。

そこで、卒業生の皆さんにも、私たち自身にも、もう一度問うてみたい。

私たちの言葉は、

相手の胸を貫き、命を脅かす弾丸になり下がってはいなかったらどうか？

相手を支配するための刃物になり下がってはいなかったでしょうか？

意見を異にする相手との対話の道具になっていただけでしょうか？

自分をも変えていく力を持っていたでしょうか？

「舟入から世界へ」とはいうが、

君が見てきた世界は何だったのだろうか？

都合のよい情報で塗り固めた閉ざされた世界ではなかったでしょうか？

君が探求心をかきたてられる、驚きに満ちた世界だったでしょうか？

そして、君たちは、これからどのような世界に出会おうとしているのだろうか？

君たちは、もはや高校生ではなくなります。君の言葉、君の持ち物、君の生活習慣、君の将来は君たちのものです。ただ、その使い方については、自由という名の下に他人に責任を負います。

「おのれに徹して人のために生きよう」という本校の校訓には、「おのれ」と「ひと」について語られています。皆さんがどのような社会に飛び込むにせよ、その社会は「おのれ」と「ひと」で成り立っています。

「おのれ」は何かに挑戦し、挫折するかもしれませんが、「ひと」と約束をかわし、許されることで、次の「挑戦」をはじめることができる。また、「ひと」に支えられて試行錯誤する「おのれ」ですが、その「おのれ」が、約束をかわし、許すことで「ひと」の挑戦を支える。

きのうの「おのれ」は、今日の「ひと」となり、今日の「おのれ」は、明日の「ひと」になる。

「挑戦」と「挫折」の循環は、「おのれ」が何かを変えようとして「ひと」と対話することで保たれます。こうして「おのれ」と「ひと」は希望を手に入れるわけです。

今日は、「おのれ」であると同時に「ひと」でもある君たちを、自信をもって社会に送り出したいと思います。困難なことですが、不安定ではあっても、この世界、変えることのできる、このすばらしい世界に踏みとどまる勇気と希望を胸に、本校を巣立っていかれることを切に願って、式辞といたします。

平成29年 3月 1日

広島市立舟入高等学校

校長 日 浦 毅